



# くさばな しんぶん

2021年3月度末号

2021 (令和3) 年  
3月19日発行  
通算第299号

「今年度が終了しました」



19日(金)にもり組、かわ組の終業式、20日(土)にやま組が卒園式を行い、本年度も終了の日を迎えることとなりました。昨年度末に新型コロナウイルス感染症が流行してから約1年。これまで誰も想像しなかった生活となりました。ご家庭におきまして、お子さまと過ごす中で様々なご苦労があったことと思います。幼稚園でも、2か月遅れのスタートとなり、幼稚園が始まって、これまで当たり前前にできていたことができず、日々、できること、できないことを考えるとともに、とにかく罹患者を出さないこと、そして、お子さまたちがその日1日を幼稚園で楽しく過ごし、

満足した気持ちでご家庭へ帰せるようにとすることを第一に保育してまいりました。

そのため、保護者の皆さまのお気持ちに沿えない部分も多くあったと思います。ですが、そうした中でも保護者の皆さまが、職員に対し温かいお言葉を掛けてくださったたり、ご協力くださったりは職員にとっても励みとなりました。保護者の皆さまの1年間のご協力に、職員一同感謝申し上げます。本当にありがとうございました。この状況はもう少しばかり続くと予想されますが、年長さんは、4月から小学校、年中、年少さんは一つお兄さん、お姉さんになります。それぞれの場所でお子さまひとりひとりが活躍し、さらなる成長を遂げることを楽しみにしております。そして、1日も早くこの状況が終息し、通常の生活に戻れることを願うばかりです。

さて、明日から春休みに入ります。くれぐれも事故や病気にはお気をつけて、元氣にお過ごしください。

「望月先生、ありがとうございました」

先日お知らせしましたように、今年度を持ちまして、望月 朋子教諭が退職することになりました。

本来であれば離任式を行い、皆さまに直接ご挨拶をするところですが、緊急事態宣言が発令中ということもあり、離任式を行うことができませんので、紙面にメッセージを送らせていただきます。

園長 影山 幸江



## 《春の息吹》

私の日課は、毎朝六時に寺の鐘を撞くことから始まります。しばらく前までは冬の間の朝六時はまったくの間の中でした。なのでヘッドランプを付けていました。今はもう相当明るくなりました。寒中は、ちょっとした「修行」の気分です。一体何のために毎朝鐘を撞いているのか。自問自答しています。鐘が鳴らなくても誰も困らないのに。寺の鐘が時報の役目を果たしていた時代は、とうの昔に終わっているのに。冬の朝の冷気は老体に悪いのに。鐘楼は小さくなっているのに、北風が吹くときなどは、いくら防寒着で身を固めていても手足がしんしんと冷えます。しかもこれからの季節、夜が明け放ってからの鐘撞きは、なんとなく間が抜けていると、自分でも思います。所詮は自己満足？

世に、夜明けの来ない夜はない、とか、冬来たりなば春遠からじ、という例えの如く、すっかり春めいてきた早朝の空気がほのかな甘い香りを漂わせています。今朝はじめて鶯のさえずりが寺の裏の竹林から聞こえてきました(そういえば今年は遅かったです)。新園庭のヒガンザクラはもう満開です。こしはソメイヨシノの開花も早いとか。椿が赤い頭をいただき、白もくれんがシャンデリアのように花を支えています。以前はお寺は梅林のようでしたが、プラムボックススイスルのため、全部伐採される悲哀を味わい、寂しい限りです。しかしもうすぐで再び植えることができそうです。

こうした大自然の息吹がざわめきだす中、終業式・卒園式を迎えることとなりました。

毎年のことながら、卒園のため今年度でご縁のなくなる方もおられます。長い間のご厚意に感謝申し上げます。この幼稚園で過ごされた歳月が有意義なものであったら嬉しく思います。ありがとうございました。引き続き在園される保護者のみなさま、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

理事 長 山城 清邦

理事長 山城 清邦



保護者の皆様へ

この度、今年度もちまして退職する事になりました。

娘達がお世話になった草花幼稚園で、ご縁を頂き9年間勤めさせて頂きました。

大きく成長する大切な時期にお子様達と過ごした日々は、私にとってかけがえのないものになりました。

やさしさ、強さ、パワー、たくさんもらいました。子宝という言葉をあためて感じた日々でもありました。

至らぬ所も多々あったと思いますが、温かい目で見てください、心から感謝いたします。

ありがとうございました。

これからのお子様のご成長をお祈りいたします。

望月 朋子

## 私のおすすめの絵本

(この欄は教職員が交代で担当します)

「だってだってのおばあさん」 作・絵 佐野洋子



敬老の日の集いにちなんで絵本を探してこの本と出会いました。「だってわたしは98だもの」が口癖で、一緒に住んでいる猫の誘いも「だってわたしは98だもの、98のおばあさんがさかなつりをしたらにわかないわ」と取り合わず、いつでもおばあさんらしいと自分が思っている振る舞いをしています。ところが99歳の誕生日にロウソクを買いに行った猫がロウソクを川に落とし、5本のロウソクになってから「だってわたしは98だもの」が口癖になり、おばあさんと猫との新しい生活が始まり、読者を引きつける物語へと展開していきます。どの学年のお子さまもどんどん引き込まれていく様子が伝わり、最後のおちの付け方や余白を残した終わりに、みんな自然と笑顔になり、読み手の私も共に楽しんだ思いがあります。猫もそうですが、おばあさんの静から動へ変化する生き生きとした絵姿が本当に素敵なのです。

絵本を通して「だって〇〇だもの、〇〇だからにわかないわ」と何らかの理由をつけて一歩が踏み出せなかった時、この絵本のおばあさんを思い出して勇気をもらったこともあります。絵本はやはりいいですね。お家時間が多くなってきていますが、お子さまと読みかきかす時にはこの本も選択肢の一つに推薦いたします。

和田純子